act 34

art, culture, tradition

［発行］札幌市教育文化会館
アクト第34号
February 2020

書の力

書家　若山象風

墨をする。余計な念が入らないよう、和紙の上に塩を撒く。真っ白な空間にスッと筆先が降りた瞬間、研ぎ澄まされた右手の感覚と和紙を走る筆先が一体となり、緩急リズミカルに生き生きとした線を書いていく。見る人の心の琴線に触れる「書」が立ち現れる瞬間です。型にはまらず新しい書を追求する書家、若山象風さんの作品世界に迫ります。

Photo : Hiroo Takatsu [STUDIO TAKE 2]

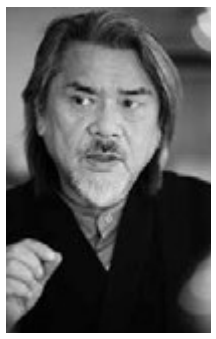
双　龍

龍が空に昇っていく様を表現。墨の濃度を調整することで、紙の特徴的な地模様が文字の中に浮かび上がり、視覚的にユニークな効果を生んでいる。若山作品の特徴である「見る人の中に絵のイメージが浮かぶ」面白さを味わえる作品。

［インタビュー］

INTERVIEW

商用毛筆や作品制作に加えて、
お客さんの目の前で希望する字を書くライブ活動もされている若山さん。
「人のやらないことをやる」という言葉の奥にある思いとは？



前向きに生きる手助けをしてくれる「書の力」

PROFILE

［書家］
若山 象風（わかやま しょうふう）

後志管内神恵内村生まれ。小学4年のときに通信教育で書道を始め、師範資格免許取得後はフリーの書家として活動。1986年から商用毛筆を開始。「大信州」をはじめとする日本酒のほか、商品ラベルや看板等を多数手がける。1990年から年に1回個展を開催。2004年から道内外で本格的な書のライブ活動を行なっている。

――若山さんと書の出会いを教えてください。

小学校4年生のときに通信教育で書道を習い始めたことがきっかけです。ほとんどの人は中学を卒業するとやめてしまうけど、僕は20歳まで続けて師範資格免許を取りました。どこにも所属せずに、フリーの書家として筆を持って生きていこうと決めて、今に至ります。これまで、パッケージ用の字などデザイナーさんとの仕事では、ずいぶん鍛えられました。例えば「牛」という字の依頼で、どんな感じが良いか聞いたら「土の匂いのする牛でお願いします」とオーダーが来て。筆で書いても全然土臭くないし、葉っぱを拾ってきてあれこれ試してもダメで、最終的に手のひらで書いてOKが出ました。指定されたイメージの字体を見つけるために、筆を口に挟んで書いて、そこで生まれた字体を右手に覚えさせて書く、ということもありました。デザイナーさんの求める字体を見つける過程でいろいろな試行錯誤を重ねたので、今はどんな字でも書くことができます。

――商用毛筆と個展用に書く作品とでは違いますか？

違います。作品はあくまで自分の書きたい文字を書く。商用文字はお客さんからの注文なので、それに沿った文字を書きます。例えばお店のロゴでも、大衆路線なのか高級路線なのか、男性と女性のどちらをメインの客層として想定しているのかなど、条件によって線の見せ方が変わってくるので、書く前に詳しく聞きます。そういったパターンもあれば、「自分たちの目指す酒ができたので」と送ってもらったものを二杯くらい飲んで、そのまま墨をすって何十パターンか書いたものを渡し、そこからラベルに選んでもらったこともあります。

――来場者の希望する文字をその場で書くライブ活動もされています。

ほとんどの人は、目の前で字が書き上がる様を見たことがないんです。なぜかと言うと、習字の先生は人の前で字を書かないから。僕は天邪鬼なので（笑）、じゃあやってやろうって。本格的にライブで書くようになったのは46歳からです。46歳のときに1回病気で倒れたのですが、回復できたのは世に返されたのだと思って。じゃあ自分に何ができるか考えたら、やっぱり字を書くことしかできない。それで、字を必要としている人のために生きようと決意して、できるだけライブをするようになりました。来場者のリクエストは家族の名前など、いろいろですね。「どんな字でもいいです」と言う人もいますが、それが一番困ります（笑）。以前は、来場者から出された字に対して「どういう風に書きますか？」と聞いていたのですが、46歳からはそういった質問をしなくなりました。相手の右手を僕の左手に重ねて、そこでイメージをもらって書いています。

――実際に自分の名前も書いてもらいましたが、線の表情など字の表現からいろいろ受け取るものがあって、すごく嬉しいものですね。

その場で泣き出す人もいるくらい、書には力があるんです。言霊ってあるじゃないですか。本当は言霊を字で表現したいのだけど、なかなかそれは難しい。それでも、ライブで字をリクエストしてくれる人には何かしらの「こういう風になりたい」という思いや願いがあるので、字を通して手助けできればと思って書いています。実は、字を書いた人から後日電話がかかってきて、「歩けなかったおじいさんが歩けるようになりました」とか「闘病中の友達へ字を贈ったら、色紙が届いた日はいろんな人に見守られているような感じがして、ぐっすり眠れたそうです」とか、そういった喜びの言葉をもらうことが多いんです。なぜそんなことが起こるのかはわからないけれど、「これがあるから大丈夫」という気持ちが、その人を強くしているのかもしれないね。一種のお守りのようなものとして受け止めてくれているのかもしれない。だから、ライブでリクエストされた字を書くときは、本当に一回一回が全力勝負です。

――作品については、どのようなことが創作のきっかけになるのですか？

例えば、道端のアスファルトから顔を出しているタンポポを見かけたときに、これを花という字に表現するためにはどうしたらいいかを考える。そうすると、ちょっと楽しくなります。あとは他の人がやらないことをやる。習字は色をつけてはいけないと言われる中、僕は最初から色の線を取り入れて、いろいろな先生から「あれは書道ではない」と批判を受けました。でも、今では色をつける書家も多い。額も、僕の作品では書道額をほとんど使わず、絵の額を使っています。なぜかというと、みんなの家に書の作品を普及させたいから。若い人は書を自分と関係ないものと思いがちですし、和室じゃないと書を置けないと思っている人も多い。そうではなくて、絵や写真を飾るように書を飾ってほしいという思いから、人のやらないことをやって書のイメージを変えてきました。

――転機となった作品はありますか？

線ならあります。習字の線って普通は角がありますよね？そういうカクカクした線ではなく、丸みのある線を書けるようになったときは気持ちよかったです。優しく見える線なので、カレンダーなどで僕の字を見た人から女性と思われていることも多いです。ちなみに、筆を持ったときに手と筆先の感覚が一致していないと字を書くことができないので、僕の場合、荷物はほとんど左手で持つんですよ。それぐらい右手の感覚を大事にしています。

――今後試してみたいことなどあったら教えてください。

2019年の個展で出した作品を書く過程で、地となる墨の色とそこに重ねる文字の色の組み合わせによる見え方に発見があって。そこから新しいアイデアが出てきたので、いろいろ実験してみようと考えているところです。新しく発見したことを使って何が表現できるか考えるのは楽しいですね。これからもオリジナルを追求して、常に先を走っていきたいです。

ARTIST WORKS

アイデアを形にすべく、墨、筆、紙のそれぞれで実験を重ねるのが若山流。
見る人の想像力を刺激する「文字による表現」をお楽しみください。

『宙』

街の光も混じる夜空を表現するため、くしゃくしゃにした紙のシワの上から書き、墨の中に白い空間が残る立体的な仕上がりに。紙に収まらない広がりが魅力。

『鯉の滝登り』

「鯉が滝を登りきり、天まで昇って龍になる」という登竜門の故事を書で表現。滝を表す銀の墨の上に「瀧」の字が重ねられ、上部へ行くと「龍」へと変化する。

『花』

これまでたくさん書いてきた「土から咲く花」ではなく、「木に咲く花」を文字で表現した作品。「絵画」と「書」の境界を軽やかに超える、遊び心あふれる一枚。

『梟』

アイヌの人々から村を守護する神として敬われているフクロウを、現代の家の守り神として召喚すべく、墨を混ぜた金墨汁で木にとまっているフクロウを表現。

KYOBUN WORKS

教文の広報物にも度々登場している若山さんの書。取り組む側の熱量や事業そのものの面白さを視覚化してくれる筆字にファン多数。今後もお楽しみに！

『教文和文化プロジェクト』

2019年に制作したロゴマークは、切り絵作家の最上怜香さんによる繊細かつ華やかなビジュアルイメージと、若山さんの力強くダイナミックな筆字が絶妙な組み合わせ。

『教文演劇フェスティバル』

道内外で活躍する劇団やユニットがテーマに関連した作品を発表し、審査員と観客が投票によって優勝を決める「短編演劇祭」を柱とする教文演劇フェスティバルでは、ガチンコバトルの迫力を表現。絵とも好相性でインパクトあるビジュアルに。

次回個展情報

書家 若山象風 社中展

2020年11月3日［火・祝］～11月8日［日］ 11:00～18:00
※最終日8日は17:00まで
会場｜スカイホール｜大丸藤井セントラル7F トップライトギャラリー
北海道札幌市中央区南1条西3丁目2　TEL 011-231-1131（代）

チャリティーライブ　11月7日［土］ 15:00～17:00
〈幼稚園・保育園に児童図書を寄贈〉
色紙1枚通常￥5,000を￥3,000にてお好きな文字を書かせていただきます。
皆様にご賛同・ご協力を頂けましたら幸いです。